東大駒場友の会

会報第42号

東大駒場友の会 二〇周年を記念して

二〇二四年度に東大駒場友の会は設立二〇周年を迎えます。第四二号となる本号では、友の会の発展を支えてくださった先生方に、座談会でご発言いただく（浅島誠、木畑洋一、小林寛道、古田元夫（敬称略））ないしご寄稿いただく（小川桂一郎、瀧田佳子（同））ことで、会のこれまでの歩みを会員の皆さまと共有することにしました。記念号として、紙面はいつもの倍の量になっています。ご協力いただいた六名の先生方に御礼申し上げます。

（受田宏之・寺田寅彦）

「味覚のアトリエ@駒場」

二〇二三年一一月二日（木）の晩に、第一二回目となる味覚のアトリエ@駒場がセミナー室で開催されました。学生の食育という企画の主旨を重視して、六〇名の参加者のうち四〇名が学生となりました。木畑洋一当会会長の挨拶に続き、日本での「味覚の一週間」実行委員長の瀬古篤子氏から、活動の歴史と目的についてお話しいただきました。今回取り上げたテーマは、フランスやイタリア、オランダからの輸入品が有名ですが、日本でも本格的な製品が作られるようになったチーズです。講演の部では、NPO法人チーズプロフェッショナル協会の名誉会長でありフランス農事功労賞協会の副会長でもある本間るみ子氏に、「チーズを知ってみよう 味わってみよう」というタイトルでお話しいただきました。一時間に満たぬ時間の中でチーズの歴史と多様性、奥深さと魅力について語り尽くしていただき、参加者は学生であるか会員であるかを問わず、チーズについての認識を改めるにとどまらず、食のあり方について考え直す機会となりました。

講演後は、ルヴェソンヴェールの伊藤文彰シェフにチーズを使った手軽だけど美味しい料理を実演していただき、締め括りに本間氏に選んでいただいたチーズ四種とそれに合う食事とを堪能しました。私の教え子も何名か参加したのですが、それぞれが個性ある本物のチーズを味わい、豊かな生活とは何かについて考えるという贅沢な体験を喜んでいました。参加学生には、得たものを忘れることなく、将来に生かしてもらえればと思います。

『秋の講演会』

味覚のアトリエから二週間後の一一月一八日（土）の午後、第八回「秋の講演会」が開催されました。西洋美術史の第一人者であり、東京大学名誉教授で大原美術館館長の三浦篤先生に、「パリのオペラ座展」を終えて―芸術の饗宴がもたらすもの」についてご講演いただきました。四年ぶりの対面での実施となった講演会と茶話会には、五〇名の参加がありました。二〇二二年一一月から二〇二三年二月にかけてアーティゾン美術館において、「パリ・オペラ座―響き合う芸術の殿堂」展が開催されました。これは、三浦先生の監修の下、日仏の専門家が連携し、五年もの準備をかけて実現した企画です。講演会の司会は、フランス文学と芸術の専門家として準備にかかわられた寺田寅彦教授にお願いしました。

三浦先生は、ガルニエ宮の魅力（建築）、マネとオペラ座（美術）、グランド・オペラの変容（音楽）、バレエの刷新（舞踊）など興味深い論点についてユーモアを交えながら解説されつつ、芸術が分化する傾向にある中で諸芸術を融合したオペラの重要性を説かれ、芸術が交流する場の創造にこれからもかかわっていきたいと話されました。参加者が満足されていたことは、茶話会で三浦先生を取り囲んで質問をしていたことやアンケートの結果から分かりました。絵画が好きな私は、シャガールの天井画（一九六四年）やエドゥアール・マネの「オペラ座の仮面舞踏会」（一八七三年）をめぐる物語が印象に残りました。駒場祭の直前だったため学生の参加の少ないことがやや心残りでしたが、これからも知の融合と交流の一環として、充実した講演会を実施できればと考えています。

東大駒場友の会、二〇周年記念座談会

受田　本日は年末にもかかわらず、お集りいただきまして、ありがとうございます。私、東大駒場友の会事務局長の受田宏之です。よろしくお願いします。事務局からは新井宗仁先生も参加しています。ご存じのように、来年度、友の会は二〇周年を迎えます。そこで友の会の創設と発展に大きく貢献された古田元夫先生、浅島誠先生、木畑洋一先生、小林寛道先生（ともに東京大学名誉教授）の四名に、友の会の歴史や今後の課題について自由に議論していただけたらと考えています。

設立の経緯

古田　駒場友の会の設立に至る契機は、三つに整理できるかと思います。一つは大学法人化の動きです。東京大学はそれまで、どちらかといえば、卒業生とのつながりはそんなに重視してこなかった。早稲田や慶應の卒業生組織はものすごく強力ですけれども、東京大学の卒業生の組織は、それと比べると非常に弱かった。法人化に伴い、大学としての自立的な社会的基盤を持たなければいけないという話になって、卒業生をどういうふうに組織するのかという課題が出てきました。これが一つの流れとしてあったと思います。

　それから、二番目は一高（旧制第一高等学校）との関係です。東大教養学部が、かつての一高キャンパスを引き継ぎ、一高の伝統を継承している組織であることは明々白々です。教養学部の先生も私より上の世代は大半、一高の出身者の方々だったんですが。他方、本郷が帝国大学の伝統を継承してるのに対して、駒場はかつて一高だったっていうのは、どうしても東京大学の内部および社会的に見て、駒場が一段低く見られる契機にもなりかねない問題で。そういう意味では、一高と東大教養学部のつながりをどういうふうに考えるのかは、非常に微妙な問題をはらんでいました。

　そういう中で、ご案内のとおり一九九〇年代の初頭に国立大学の教養部解体という動きが起きて、改めて教養学部、教養部という組織の在り方について問われる中で、東大教養学部としても駒場の教養教育のある部分が一高の伝統を継承してるっていうのは明白な事実ですが、それを二一世紀に向けて、どういうふうに継承して発展させていくのかを明らかにする必要が生まれました。

　当時、駒場の中で一高の伝統を継承していく団体として一高同窓会がありましたが、会員の方々の高齢化で組織としての維持が非常に難しくなっており、教養学部とのしかるべき関係をつくらないと一高同窓会が存続できないという問題が生じていました。この課題が一高と教養学部との関係の二番目の柱であったかなと思うんです。

　三番目は一高という問題の派生ですが、駒場寮問題という課題です。こちらにこの問題を担当された小林先生がいらっしゃいますが、駒場寮の廃寮という課題を、一九九〇年代から二一世紀初頭にかけての教養学部は抱えていました。駒場寮は一高の伝統を引き継いでいる非常に大きな存在ですし、一高の卒業生の方々を含めた、駒場寮に思い出を持ってらっしゃる方々の理解を得つつ、どう解決するのかという課題を教養学部は抱えていました。

古田先生

　学部のエネルギーも大半を駒場寮問題に注いでいた時代でしたので、そういう中で、先ほど申し上げた法人化とか一高の伝統の継承とかの問題が、駒場寮問題をうまく解決しないことには、恐らく展望が見えてこないっていう位置にあったと思います。それで、そういうことも念頭に置いて、友の会が構想されたという面があると思います。この座談会が行われている駒場ファカルティハウス自身、かつての同窓会館のあった場所に建てられた建物なんですけれども、この建物が建ったのは、教養学部が駒場寮問題を解決できたからで、恐らくそれがなかったら、このような建物は建たなかったかなと思います。

　この建物が建ったことによって、老朽化してもう取り壊す以外の選択肢がなかった同窓会館を新しく生まれ変わらせて、その中に一高の同窓会も同居できるという展望が開かれたという面がありまして、駒場寮問題が当時の教養学部にとっては、あらゆる課題の要だったということが、駒場友の会の発足につながる一つの筋だったというように私は理解しております。

受田　ありがとうございます。多くのものを背負って出発されたことが分かりました。

浅島　今、古田先生が言った三つの柱、これをどのように実行していくかということですが、僕はその頃は評議員をやっていて、ちょうど国立大学の法人化の時、学部長になりました。実はこの駒場友の会ができたのは、二〇〇四年の三月二〇日で、それはちょうど法人化の前なんです。法人化の前に、なぜそういうことが起こったかというと、それは、一つはやはり一高の人たちの熱い思いがあったのと、教養学部の先生方で教養教育をどうするかということの議論がありました。これは何とかしなきゃならないと。その時に、当時既に退官されていた元教養学部長の本間長世先生や嘉治先生たちが中心となって、一高の問題をいろいろ語られていたんです。われわれも赤坂にある一高の同窓会のほうへよく行きましたよ。そして教養教育のリベラルアーツをどうすんだということを言われました。

　その時ちょうど三重野さん（元日銀総裁）がいて、「一高のリベラルアーツは守れますか」と言われたんで、「われわれが守ります」と言って。そうした時に、そこにあった一高の建物（同窓会館）を壊していいと、いや、東大のほうに渡すというふうに言ってくれたんです。実は幾つかの条件を出されたので、そういう問題も含めて向こうの要求を全部聞いて教授会に諮りました。最後、壊す時に、一高出身の方々が同窓会館に集まったんですよ。みんな、お酒の一升瓶を持って寮歌を歌うんです。あの姿を見た時に、彼らの団結力と教養学部への思いと、それから、自分たちの駒場キャンパスに対する愛着、そういうものを私は非常に感じました。

　やはり一高の東大に対する思いの一つは、教養学部です。彼らが高齢化しているので一三〇周年を区切りにすると決議されたんで

す。それで一億円は集めると。それが目標額をかなりオーバーして集まったんです。その集まったお金を教養学部に寄付して、それがその後、一高記念基金となり、優秀な学生に授与される一高記念賞ができました。今でも卒業式の時に渡してるものですね。そういうふうにして、一高とのつながりは残っています。それから一高にあった、夏目漱石とか関係した人の作品や資料、そういう文化的なものもわれわれは受け継いだと思っています。

次に教養学部をどうするかという問題です。全国で教養学部がなくなる中で、東大が教養学部をどうするかというのは非常に大きな課題だったと思うんですけども。私はやはり、リベラルアーツも含めて教養教育の大切さっていうのを、東大が教養学部を残したことで駒場の先生方も含めて皆さんに共有できたと思いますよ。これが友の会の大きな力になってます。そして本間先生はじめ嘉治先生や、それから毛利先生たちを含めて皆さんよく協力してくれました。

受田　浅島先生、ありがとうございます。一高に関連して何か補うことありますか。

木畑　設立経緯に関しては、お二方の話でもう尽きていると思いますが、浅島先生も強調されたように、やはり一高ファクターっていうのが非常に大きかったと思うんです。だから、今、話に出ていたように教養教育をどう駒場の伝統として受け継いでいくかが問題です。

一九九〇年代に全国の国立大学で教養と名の付くものがどんどん廃止されていったわけですが、駒場においては、それに抵抗する形で教養学部を残して、教養教育を守り続けました。他の大学はその後、本当に反省して、なんであんなことやったんだっていうことを、全国のいろんな大学の会議に出ても言うようなことになりました。その中にあって、駒場に教養学部が残っているのは、一高以来の伝統があるということを、多かれ少なかれ意識する人間が多かったからだと思います。

一高の同窓会の方もそれが非常に重要だと考えられていて、それを継承するために、どういうことがあるのかを検討されました。その一つとして、先ほどお話にあったように、一高で集められた寄付の一部をこちらに下さいました。それを基に一高記念賞を設定して、駒場における教育の成果を顕彰しています。それからそういう精神を受け継いで駒場全体をどう盛り立てていくかということもあって、こういう友の会のような組織をつくるということになったわけです。

私はちょうど古田学部長、浅島学部長の下で副学部長をやりましたが、一高同窓会との関係にも結構たずさわって、さっきの浅島先生のお話にも出てきた、寮歌をみんなが歌ってるところも見聞きしました。そこにリベラルアーツに懸ける意気込みを強く感じました。

それから、一時期駒場に関わった旧制高校としては東京高校もありました。東京高校も同窓会組織を畳む前に、駒場に同窓会の場所を置かれていました。一高の同窓会は、駒場友の会に団体加入をされましたし、東京高校同窓会もされたはずです。東京高校のほうは、あまり目立たないけれども、同じようにリベラルアーツの伝統がありました。良質のそういう伝統をいかに受け継ぐかというところが、駒場友の会ができていくに際しての、駒場全体の教育との関わりで、やはり重要な点だろうというふうに思います。

木畑先生

駒場寮問題

受田　小林先生、駒場寮問題についてお話しいただけるでしょうか。

小林　そもそも一高は全寮制だったので、全学生が駒場寮に入り、授業を受けて生活をしていたのです。大体、学生数が千人くらいだったと思います。この駒場寮が戦後は新制の東京大学教養課程のキャンパス内の学生寮になったわけです。そこに今までお話に出てきている一高イズムがありました。それはどこから芽生えるかというと、やはり寮に寝泊まりするということからなんですね。それから駒場寮は、自治会活動、クラブ活動、サークル活動、個々の活動といった時間制限のない自由な活動の巣になっているわけです。運動部、文化部を問わず、泊りながら活動できていました。

もう一つ重要なのは、学生運動の拠点になっていたことです。学生運動が盛んな時代はいろいろな政治活動団体が入っていた。そこで東大生をある意味で教育して、政治的なものへの関心を高めたのです。オリエンテーション委員会というのは今とは全く違った形でした。とりあえず、そういう学生の運動を中心としたものでした。それから、学生自治がものすごくありました。

特に重要だったものとして、寮自治があります。寮には警察は入っちゃいけない、校内にも入っちゃいけないという寮自治に、非常に誇りを持っておりまして。寮委員会が、入寮する学生の選別をするとかいろいろしていて、寮機能が特殊なものになっていました。

この駒場寮をどうして壊さなければいけないかというと、学内寮があるから学生の運動が盛んになってストライキなども起こるから、「学内寮を廃止すべし」という方針が国から出されたのです。そんなこと言ったら、駒場キャンパスの敷地は三分の一近くが寮の管轄みたいなものでしたから、そんなことはとてもできないだろう、と。でも結局それをやらないと文部科学省としてもちゃんとした支援ができないよ、ということでした。

それから研究活動では、駒場寮内に第一研究室というものがありました。建物が北寮、中寮、明寮と幾つかあって、駒場寮ではあるものの第一研究室（旧南寮）は先生たちの研究室になっていました。そういうもろもろのことがすべて複雑に絡み合って、学内寮廃止の方針については大学の中で、総長をはじめいろいろ苦労されて、結局つぶすことに決めたわけです。それで誰がつぶすかというと、「教養学部がつぶしなさい」ということになって。文部科学省としては、「大学の自主的な意向によって寮をつぶすんだという姿勢をあくまでも保った形でやる」という、その辺の、いわゆる政治的ないろんな動きがありました。結果的には、寮をつぶすという方針を決めざるを得なかったというわけです。

寮をつぶすとなると、学生や寮の人たちとのいわゆる衝突がどうしても起きざるを得な

い。それで大学としては、駒場の文化を大事にしながら、宿泊機能については三鷹寮（三鷹国際学生宿舎）のほうに移しましょうと。それができて、じゃあ、最後に駒場寮をつぶしますよって言ったら、結局、今話した寮内の学生の活動とかサークル活動とかもみんなつぶれちゃいます。そこで、サークル活動のために「サークル棟」をまず造ろうっていうことで、明寮の向こうのほうに「多目的ホール」と「多文化交流施設」を造り、お茶室は一二郎池の向こうに造ったりしました。しかし、最後の最後、やはり学生運動の拠点となるものをどうしてもつぶさなきゃいけない。

それが結局、学生運動の最後の正念場でしたね。そういうものを含めて、一高時代からの伝統の教養学部というのは、東大の中でも非常に特殊な雰囲気がある。これをなんとか生かすような形で何かできないかという点に、友の会の設立とつながっていくところがあると思います。

法人化と社会連携

受田　続いて、設立後の大きな変化である友の会の一般社団法人化について、どなたかお話しいただけないでしょうか。

小林　地域との連携を非常に考えた組織にしようっていうので、駒場周辺の一般の方々、駒場を愛する人、それから保護者、そういう人たちも含めて誰でも入れる総合的な形の中で、さらにリベラルアーツというものを大事にした交流の集団をつくろうと。単なる同窓会ではない、自分の母校を大事にするだけでもない、もう少し地域ぐるみなものをやろうということになりました。

小林先生

それを推進したのが山本泰先生。先日亡くなられたのですが。山本先生は社会学が専門で、社会と大学とのつながりをどうすればいいかについてよく考えられて、ボランティアというか任意団体の形として始めました。

寄付金を集めようということで、一年生は全員、教養学部に入って駒場キャンパスに来ますから、ちょうど新入生の保護者から寄付金を頂くという形で受け皿ができました。それをどういうふうに使うかについては、学生の活動のために使っていく、サークル活動や学生の活動を支援していこうという形です。

山本先生はなかなか文化的な活動が好きでした。音楽の会があり、これは小川桂一郎先生が中心に動かしていったんですが、もう一つグッズを作るのも好きで、一高絡みの歴史的なグッズを作ることを気に入ってました。

当時の世の中に、任意団体から一般社団法人にするという流れがあったものですから、一般社団法人に転換しようということを、私が三代目の会長の時に考えてやりました。ただ、あまりにも組織が複雑過ぎて、行政書士さんと相談をした結果、ある程度のひな形に沿った形ならできるけど、定款が難し過ぎて、そんなものは無理といわれました。「じゃあ、僕がやります」と言って、その定款作りを自分がやりました。学会でいろいろ定款を作ってましたので、経験を生かして定款を変えて法人化をしました。それを奇跡的だけど一年のうちにやったんですね。そんなことできるわけないって当初山本先生も反対したんですけど、「いや、やります」と言って。やっぱり法人化という形にしないと税金が問題なんですよ。大きなお金を動かすのに、きちっとした会計の処理が見える形でやるべきだからです。

定款の最初に、目的が書いてあります。「友の会の目的」っていうのは、インターネットで見ていただくと分かると思いますが、最初の一高同窓会からの流れをそのまま生かす形で、その中にリベラルアーツだとか、いろんな活動を支援する形の交流があって、何回読んでもよくできていると思っています。友の会の法人化にとって幸いなことに、小川先生が当時の学部長だったんですね。小川先生は寮問題の最後の特別委員会の時に学部長補佐をやってた人です。

法学がご専門の早川先生にも定款を見ていただいてOKっていう話になって。それで二〇一七年に「駒場友の会」から「一般社団法人東大駒場友の会」として法人化され、浅島先生が法人化された初代の会長、木畑先生が二代目という流れになっています。

浅島　どういうふうにしたら教養学部全体から新しい友の会への支持を得られるかということがかなり議論されましたね。そのための一つに、教養学部長が新入生の保護者と懇談するものを作ろうというのがありました。

木畑　新入生保護者と教養学部長との懇談会ですね。

浅島　あれは非常によかったなと思うんですね。それから教養学部の先生方にも協力してもらって学内ツアーをやったんですよ。あれもやはり、よかったなと。それから社員総会の前に理事会をやるんですけども、その理事会のメンバーを選ぶ時に、できるだけ幅広く、学内だけじゃなくて日本で広く活動している先生方にも入ってもらって、可視化できるような仕組みにしました。

あと、社員総会と活動報告会の日に開催される選抜学生コンサート。東京大学におけるいろんな学生の活動を社員総会で示すことができたのは、よかったなと思っています。

小林　その活動の中で大きな影響力を持っていたのは、小川先生ですね。小川先生は音楽好きなんですよね。東大に入ってくる学生の中でも、子供の頃からピアノとかバイオリンとかやっている人や、東大か藝大かどっち選ぼうかなっていって東大入ったっていう、それくらいのレベルの人たちが結構いまして。小川先生自身も東大と藝大を迷ったらしいです。そういう人たちがいるので、東大での芸術活動のレベルは非常に高いんですね。

あとはもちろん、駒場祭への支援と、それから図書館ですね。大学からの図書費は限られているので、一〇〇万円くらいは毎年、学生の図書のために寄付してあげようとかね。

浅島　クラブ活動にも支援しましたね。

小林　三鷹寮への支援も少しあったかな。

受田　三鷹寮の支援について、駒場寮と関係はあったんですか。

小林　駒場寮との関係っていうわけじゃなくて、ベンチがなくてかわいそうなので購入したとか。学生の寮活動に必要なものを希望してくれれば、それを支援したい。もっとお金があれば、もっといろんなことできるんですけ

どね。あとは、駒場友の会の時代なんですけど、正門ですね。一高のマークが入ってる門扉が壊れたので、寄付金を集めて新しくした。あれも駒場友の会です。

いろんな学内の環境整備を友の会がやった。駒場東大前駅から降りたところのプランターとか、樹木の名札とか、ああいうのも駒場友の会の活動の一環です。

木畑　新入生保護者と教養学部長との懇談会では、それこそ目に見える形で、駒場の活動や教育の内容を保護者に伝えています。それからキャンパスツアーをやって、駒場キャンパスの建物や自然の豊かさを見てもらうわけですが、その活動は非常に大きな意味を持ってるんですよね。

受田　懇談会は今も年間の最大イベントになっています。あと、今の話とも関わりますが、文化活動あるいは社会連携活動の一環として「高校生と大学生のための金曜特別講座」の支援があります。

浅島　これは、二〇〇二年頃に生物学教室の松田良一先生が始めて、今はどんどん広がっていって、教養学部の一つの社会貢献にもなってるので、私、それは非常によくやってくださったと思うんです。その途中で、金曜講座の運営が一時ピンチに陥ったんですよ、財政難で。その時に駒場友の会がサポートしたんです。それで継続できて、すごく発展して、高校生だけじゃなくて大学生にも。今は社会にものすごく広がっているよね。

浅島先生

受田　これを聞けることが友の会の会員へのセールスポイントになっています。

それではいよいよ、今後の友の会に期待すること、課題についてお話しいただければと思います。

友の会のこれからについて

浅島　私はこういう友の会みたいな良い組織・活動は、なくなれば、たぶん、復活は大変難しいと思うんです。ですので、これをどう継続していくかということは、教養学部にとっても、あるいは在学生にとっても、教員にとっても、重要だということを再認識するようにしたほうがいいと思います。

活動も、もうちょっと現代に合わせたような活動を、やはり学部の執行部でもっと考えていくことが重要かなと思います。そのためには財源をどのようにして集めるかってことを、もっと積極的に考えてもいいんじゃないかなと思います。駒場には普通は見られないようなものがたくさんあると思うんです。例えば、駒場博物館にはアンデスなどのいろんな世界的遺産もありますし、それから一高時代の、例えば夏目漱石の筆跡のものや、川端康成の自筆の文章があるんですね。そういうものが博物館の中にたくさんあるし、一号館、九〇〇番講堂、図書館などの建物の内外見学、キャンパス内の散策などを大学としては難しいが、友の会としてクラウドファンディングみたいなもので本来見られないものが見られますよとか、私はやってもいいのかなというふうに思っています。

木畑　具体的な寄付の使途も、寄付したほうとしては、関心があると思うんです。友の会の会報で、例えば学生の活動を紹介するとか、保護者が寄付したお金がこういうふうに使われているということが具体的に分かるといいのかなという感じはします。

古田　確か二〇〇四年が一高創立の。

浅島　一三〇周年。

古田　一三〇周年だから、来年、たまたま四が付く年ですけど、一五〇周年ですね。

四が付く年には、一高の大々的なイベントをやるとか、九が付く年は教養学部の発足だから、大々的なことをやるとか、定期的な行事みたいなのを定着させる。また、一高のファンは結構、世の中にたくさんいると思うので、ファンをうまく引き出すのは意味があるかなと思うんですね。

二〇〇四年は一高絡みの行事が、駒場でかなりたくさんあって。一高のお宝で世に誇るべきものはどんなものがあるのかっていうのは、当時の教養学部報に半分くらいは出てるんじゃないかと思います。

それから、さっきの金曜講座もそうですけど、お話伺ってて僕も思い出したんですが、当時、学部のほうでは高大連携っていう話が出てきて、それで松田先生のやっておられる活動と学部が公式の接点を持って応援しようって話になって。それで、この駒場友の会は教養学部の社会連携で柔軟に対応できる組織としても機能してきたと思うので、その面でまだいろんなことが工夫可能なのかと思います。

小林　せっかく古田先生がおいでになるから、友の会主体でベトナムツアーってどうですか。これだけのベトナム通はいないですよ。それで旅行社とタイアップしたっていいじゃないですか、友の会が窓口になって。いろんな文化的な発信を、世の中に開けた形でやればいいんですよ。

古田　今、僕が働いてる日越大学は、ベトナムでリベラルアーツというのを理念として掲げている数少ない大学の一つなんです。当初は悪戦苦闘したんですけど、リベラルアーツという言葉のベトナム語訳は社会的に定着しつつあって。リベラルアーツ研究所っていう民間の教育NGOみたいな組織ができて、今度そこの主催でベトナムにおける教養教育の歴史っていうシンポジウムをやろうという話になっています。そういうのも含めたベトナム旅行みたいなことでしたら、お手伝いできるかなとは思います。

浅島　金曜講座は、お金を取っていないの？

新井　現在、社会人は友の会会員でしたら無料で受講できますが、運営資金を継続的に確保するためには今後、社会人の方々には受講料をお願いしなければならないかもしれません。

受田　最後に、何かメッセージがあればお願いします。

浅島　もっと東大は元気になったほうがいい。東大が元気になるには、やはり先生方がまずは自分のいる所に誇りを持って、そして学生に対しては学生を育てるという気持ちでやる。学生が東大で学んでよかったと。その

ために東大駒場友の会はサポートしますと。僕も東大の先生から聞いたんだけれども、財政難で「研究どころじゃないんですよ」と言う先生もいました。研究したい人が研究できないっていう環境は、私は大学としてよくないと思っています。特に実験がらみでいえば、実験ができないっていうことは、その延長で若い人を育てられないってことです。若い人に夢を与えられないような環境は駄目だよ。早く改善することだと思います。といっても、改善策を出すのは難しいけれど。

受田・新井　先生方ありがとうございました。

浅島誠（あさしままこと）：
一九四四年生まれ。専門は発生生物学。二〇〇三年から二〇〇五年まで教養学部長。現在は帝京大学学術顧問・特任教授。

木畑洋一（きばたようい ち）：
一九四六年生まれ。専門はイギリス現代史、国際関係論。二〇〇五年から二〇〇七年まで教養学部長。東大駒場友の会の現会長。

小林寛道（こばやしかんどう）：
一九四三年生まれ。専門は運動生理学。スポーツ科学のパイオニアとして、今もQOMジムの運営などにかかわる。

古田元夫（ふるたもとお）：
一九四九年生まれ。専門はベトナム史。二〇〇一年から二〇〇三年まで教養学部長。二〇一六年より日越大学学長。

駒場のオルガンとピアノ

小川桂一郎

駒場キャンパスには、パイプオルガンとコンサート用グランドピアノがあり、それぞれの演奏会が年に何回か開催されています。東大駒場友の会はこれらの演奏会を協賛しています。ここでは、駒場のオルガンとピアノに長く関わった教員（化学）として、導入の経緯と演奏会にまつわる思い出を記してみたいと思います。

第100回記念オルガン演奏会　撮影オルガン委員会

パイプオルガンは、本学卒業生森稔氏の父森泰吉郎氏（森ビル株式会社初代社長）から寄贈され、一九七七年に九〇〇番教室に設置されました。音楽大学でもない駒場へのオルガンの設置が教授会で承認されたことは、駒場には文化芸術を重んじる教員が多いことの表れといえるでしょう。オルガンの設置と合わせて、オルガンの運用のための「オルガン委員会」が教授会の下に設けられました。

当時大学院生であった私は第一回演奏会の写真係を務め、のちに教授会構成員になるとオルガン委員になりました。オルガン委員には、専門が音楽学ないし音楽に近い方もいますが、多くは音楽を専門としていません。しかし、全員が無類の音楽好きなので、オルガン委員会は音楽同好会のようでもあり、駒場ならではの学際的な雰囲気に溢れています。

そんなこともあって、オルガン委員会は「言語と音楽」というテーマでオムニバス授業を行なったことがあります。各委員がそれぞれの専門分野から音楽について論じ、第七〇、七一回オルガン演奏会も授業に組み込みました。最終回は演奏家に交じって教員も演奏しましたが、会場の学際交流ホールは立ち見がでるほどの盛況でした。

初心者向けのオルガン講習会を開催したところ、受講した学生が「オルガン同好会」を立ち上げました。同好会の学生は、演奏会に伴うさまざまな仕事を引き受けてくれました。同好会には驚くほど上手い学生もいて、その後国際コンクールで優勝して、今はチェンバロ奏者として活躍している方もいます。

オルガン演奏会は、発足当初こそ盛況でしたが、私がオルガン委員会に入った頃は低迷気味でした。いろいろと試みを重ねていくうちに聴衆は増え始め、マリ＝クレール・アランによる第七三回演奏会（一九九五年一〇月）は満員となりました。アランの演奏は評判通り素晴らしかったうえに、講演も面白く、学生からの質問にはにこやかに答えておられました。アランは、駒場の聴衆の深い集中力を称賛され、駒場での演奏会がそのときの演奏旅行の中でもっともよかったと言われていたそうです。駒場の聴衆への賛辞は、他の多くの演奏家からも寄せられています。

第一〇〇回記念演奏会（二〇〇四年六月）は、鈴木雅明氏とバッハ・コレギウム・ジャパンによる演奏でした。会場は超満員となり、入れない人も出ました。オルガンを寄贈してくださった森稔氏夫妻も来場され、終演後は祝賀会が開催されました。この演奏会と祝賀会は、浅島誠先生（前駒場友の会会長）が学部長として支援してくださいました。第一〇〇回演奏会以降は、演奏会のたびに九〇〇番教室の周りには長蛇の列ができ、駒場の名物といわれるほどになりました。

二〇〇六年には、旧駒場寮跡地に「駒場コミュニケーションプラザ」が完成し、その中に本格的な音楽練習室「音楽実習室」ができました。浅島学部長がスタインウェイのコンサート用グランドピアノ（D型）の導入を提案され、後任の学部長であった木畑洋一先生（現東大駒場友の会会長）のもとでそれが実現しました。ピアノの運用のための「ピアノ委員会」が設立され、スタインウェイを用いた演奏会は、招聘音楽家による演奏会とオーディションで選ばれた本学学生による「教養学部選抜学生コンサート」の二本立てとし、それぞれ年に二回程度開催することが決まりました。

二〇〇六年一二月にお披露目として小山実稚恵さんによる演奏会が開催され、二〇〇七年三月には第一回教養学部選抜学生コンサートが開催されました。音楽実習室での演奏会は、演奏者との距離が近いこともあって、会場全体に強い一体感が生まれます。また、息遣いのような最弱音から、身体が震えるような最強音まで味わえるのも魅力です。

選抜学生コンサートでは、毎回、東大生の

音楽的能力の高さに脱帽するとともに、音楽へのひたむきな思いが伝わってきて感動します。そのような出演者の中からは、音楽の道に転じた人もいます。

何かに熱中しているときの高揚感は、何ものにもまさる喜びで、その対象は音楽に限りません。駒場はその喜びを見つけるのに最適の場です。駒場がそのような場でありつづけることを願っています。

（東京大学名誉教授）

夢の方へ
―「駒場友の会」草創のころ

瀧田　佳子

久しぶりに緑濃いキャンパスを歩くと、会員の皆さんと樹木にプレートをつけた時のことが思い出される。友の会主催のイベントのなかでもはやく、発足まもなく最初の講演会と散策がおこなわれている。春のしだれ桜、大島桜も秋の銀杏並木も見事であるが、珍しい古木が旧同窓会館の南側にあることを知ったのもこうした機会であった。また、この頃東京大学第一回ホームカミングデーが開催され、駒場では友の会が共催として、世界的に著名なチンパンジーの研究家である、イギリスのジェーン・グドール博士を長谷川壽一先生ご夫妻のお力添えでお招きし、九〇〇番教室で講演会をおこなった。三年前、雑誌Timeの表紙を飾った博士の知的で深く美しい表情に懐かしさがこみあげてきた。今は広く環境問題に取り組み、特に若い人々への啓蒙活動に力を注いでいる八七歳の彼女の姿に友の会の歩んできた年月が私のなかで重なったのかもしれない。ロシアの若きピアニスト、ユリア・チャプリーナさんが数理科学研究棟の大講義室でおこなったコンサートも超満員の盛況、後のサンドイッチ・パーティーも好評で、音楽関係の行事は現在まで続いている。駒場博物館の特別展「矢内原忠雄と教養学部」(共催)に感銘を受けた会員も数多くいた。体育の渡會公治先生による体操教室、さらには「味覚のアトリエ」により「食」への関心も広げることができるようになった。

今年「駒場友の会」設立二〇周年を迎えるにあたって、まず、これまで支えてくださった会員とご関係の皆さまに感謝の気持ちを捧げたい。二〇〇四年(平成一六年)三月二〇日、時おり雪のちらつく春分の日、「駒場友の会」設立総会が晴れやかに開かれた。国立大学法人化など大学内外の問題が社会との関係で見直されてきていた時期で、古田元夫先生を中心に準備委員会で議論を重ねて大学の研究・教育及び地域と社会の発展に寄与できるような支援をする新しい会が生まれようとしていたのである。新しい友の会の理念や目的、設立総会の模様は会報二二号に小島憲道先生が一〇周年記念として詳細にお書きくださっている。ここで本間長世会長、嘉治元郎、毛利秀雄副会長、および理事（浅島誠、石井紫郎、大澤吉博、落合卓四郎、小林寛道、遠山敦子、蓮實重彦、原田義也、古田元夫、宮川清）、監事（瀧田、風間勝昭）が選出され、新体制が発足した。会長の挨拶、パーティで祝辞をいただいた遠山敦子（元文部科学大臣）、三重野康（前一高同窓会理事長）、ほかの方々が揃ってリベラル・アーツ教育の伝統とその継承と発展の重要性についてお話になられたのが極めて印象的だった。

さて、旧同窓会館の跡に建てられたファカルティハウス（海外の大学では当たり前のレストラン付き施設がやっとできました）の二階に連携を進める一高同窓会と共有の事務室も出来、本格的な活動をスタートした友の会であったが、設立の翌年、事務局長大澤先生の急逝という思いもかけないことが起こった。かつてほぼ二人だけのゼミで助け合った友を失うというショックのなかで、私は事務局担当の理事としての仕事を引き継ぐことになったのである。会報を充実させてくださった高橋宗五先生の後、長く事務局長のお役をひきうけてくださったのが山本泰先生であった。以後私たちは山本先生の驚くべき能力に接することになるのだが、例えば、ある日の事務局運営会議、最後の時限の授業を終えて集まる先生方（兵藤俊夫、遠藤泰樹、小川桂一郎、高橋宗五先生はじめ、各専攻から加わっていただいた多くの方々）に対して、膨大な資料と用意された新しい企画案を次々と説明される。鋭い質問ににこやかに答える、私たちはなにか共同体のような雰囲気のなかに投げ込まれていたようでもあった。教養学部・大学院の教育と研究を支えるという友の会の目的について主に私たちは考えていて、会員になることのメリットは何かということを考えていないのではないか。図書館が利用できるだけではない何かが必要なのではないか。従来の同窓会が卒業生中心であるのに対して「駒場友の会」には「会友」というカテゴリーがある。卒業生に着目するだけではなく、入学する新入生のご父母に二年間会友になっていただく、新入生のご家族に対して私たちができることとは?こうして生まれたのが、「新入生の御父母と教養学部長の懇談会」という考えであった。第一回は、木畑洋一学部長にお願いし、新入生のご父母一二〇名あまりをお招きした。木畑先生のご講演のタイトルは「駒場が若かった頃、私が若かった頃」であったが、そこに「駒場友の会が若かった頃」を付け加えたい。大スクリーンを使っての会場は熱気に満ち、その後、キャンパスツアー（ここでも山本先生が引率の先生一〇名にグループ分けし、研究室訪問などの指揮をとった。なかには時計台の塔に上るというのもあり、大人気であった。塔のなかの整備は事務方の大いなるご協力）、懇親パーティ（小川先生のカンツォーネ独唱あり）と続いた。大学と学生のご家族が近づいた画期的な一日であっ

た。数日後、事務局で、遠方からも届いた多くのお礼のお葉書を一枚一枚感激しながらみんなで読んだことも忘れられない。

草創期の思い出はつきないが、ここで、昨年六月七日、山本先生がご逝去されたことを記さなければならないのはまことにつらく悲しみは深い。先生、どうぞ安らかにお休みください、と申し上げると懐かしい声が聞こえるような気がする。あの頃、私たちが熱心に語り合ったこと、それはそれまでどこにも類をみないこの上なく新しい友の会を作っていくという夢のようなものだったのではないだろうか。この二〇年の歴史は夢のほうに向かって確かに歩んできたことを示していると思う。そしてこれからもまた、その道は豊かに続くであろう。

（東京大学名誉教授）

◆東大駒場友の会オリジナル 学事カレンダー二〇二四年度版

駒場Iキャンパス生協購買部にて、三月下旬より販売いたします（一部 税込九九〇円）。

学生・教員・職員による応募写真（キャンパスの風景写真）を掲載しています。どうぞお手に取ってご覧ください。

また、当会にご寄付いただいた方にはカレンダーを一部プレゼントしております。

◆金曜講座の受講方法について

東京大学教養学部主催「高校生と大学生のための金曜特別講座」は二〇二四年度夏学期（Sセメスター）もオンラインで開講いたします。

受講を希望される会員の皆様は、左記のQRコードまたは https://bit.ly/3w4aebf にアクセスし、必要事項をご記入の上、お申込みください。

受付手続きに日数を要するため、直前にお申し込みいただいても講座の受講に間に合わない可能性もありますので、ご注意ください。

◆駒場博物館

駒場博物館では三日二〇日から特別展を開催いたします。

特別展 日本農芸化学会創立一〇〇周年記念展（仮）

会期：三月二〇日（水）～九月八日（日）

開館時間：一〇時～一七時 火曜日休館

入館無料

今年創立一〇〇周年を迎える日本農芸化学会を紹介する展覧会です。「農芸化学」という研究分野は、かつて駒場の地にあった東大農学部時代から始まっており、その一〇〇年の歴史を振り返ります。

（ご来場に関する最新情報を事前に駒場博物館ウェブサイトにてご確認ください）

http://www.museum.c.u-tokyo.ac.jp

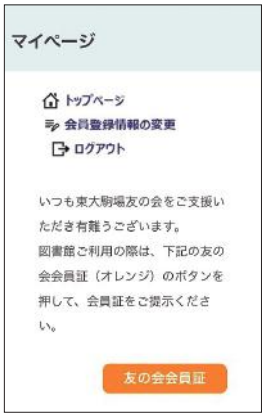
◆WEB会員証へ移行のご案内

当会は、ご入会された方にプラスティック製の会員証を発行しておりましたが、二〇二四年度より新規会員証の発行を停止し、WEB会員証に移行します。

なお、従来の会員証も記載の有効期限まではご利用いただくことができます。

■「WEB会員証」のご案内

友の会WEBサイトにログイン後、マイページの「友の会会員証」をクリックしてください。



会員証画面が表示されます。スクリーンショットは無効です。

（会員御本人にログイン頂いていることを示すために、銀杏のロゴが動きます）

東大駒場友の会会報［第 42 号］2024(令和 6)年 3 月 15 日発行
東大駒場友の会 会長 木畑洋一

〒153-8902 目黒区駒場 3-8-1 東京大学内
お問い合わせ等は、メールでのご連絡をお願いします
メール info@tomonokai.c.u-tokyo.ac.jp
web サイト https://tomonokai.c.u-tokyo.ac.jp/

デザイン・印刷 株式会社双文社印刷
https://www.sobun-printing.co.jp

会報のバックナンバーをインターネット上でご覧いただけます。
東大駒場友の会ホームページのトップ画面に「会報バックナンバー」というボタンがありますので、そこからお入りください。

穏やかな日差しの中でゆったりと
くつろぐことのできる

フランス料理
ルヴェ ソン ヴェール 駒場

東大駒場友の会会員カードをお持ちの方は食後のお飲み物（コーヒーまたは紅茶）が 1 杯おかわり可能です。
ご注文の際にご提示くださいませ。
［営業時間］ 11:00～14:30、17:00～21:00
Tel：03-5790-5931 / Fax：03-5790-1902
◎駒場ファカルティハウス内